

日本近世における村役人の資質と文字文化

工 藤 航 平

【要 旨】

本稿は、日本近世の地域社会を主導した村役人らに求められた資質とその再生産の仕組みを、文字文化との関係から解明したものである。村役人に求められた資質を解明するための分析素材として、近世を通じて全国各地で作成された跡役願書の文言の変化を取り上げた。また、近世後期以降の地域教育と資質の再生産との関係についても検討を行った。

通時的に全国で広く作成され定式化した跡役願書は、19世紀になると領主（主に代官所）へ提出される書面に人物評価としての算筆文言が新たに書き加えられるようになった。この要因について本稿では、①年貢「村請」から御用「村請」へと村の役割が変質したこと、②広域化・多様化・複雑化する地域社会において総合的な能力が期待されたこと、③地域教育を背景にした村民の知的力量の向上によって村役人への期待も相対的に高まったこと、④家格保持を目指す村役人自らが強く自覚したことを指摘した。そして、村役人の高い資質を共通認識とした領主・村役人・村民の合意形成が、跡役願書において算筆文言として顕れたと評価した。

また、近世を通じた実務経験や家庭内〔私的・個別的〕での資質の再生産は、19世紀になると地域教育の場〔私的・集団的〕で担われ、地域の安定化が危急の課題となった幕末期維新には郷学設立など地域全体で〔公的・組織的〕に対応するに及んだと評価した。

近世を通じた社会の成熟と文字文化の隆盛を背景に、19世紀初頭を画期として村役人の資質への期待と要求はより高度化・総合化し、その再生産の手段も段階的に整備されていくことが解明された。

【目 次】

はじめに

1. 村役人の資質と“算筆文言”
2. 江戸町名主の跡役願書と資質
3. 村役人の資質の再生産と地域教育

おわりに

はじめに

徳川政権下では、基本的に文字は支配の道具として重要な役割を果たしたが、それを民衆が自らの武器として獲得していく過程でもあったといえる。

徳川政権は兵農分離のもとでの村請制を基盤としており、行政単位としての村落ごとに算筆

能力を有する村役人の存在を前提としていた。小前百姓らも当初は「無筆無算」な存在とされていたが、小農経営の安定化と「家」の成立に伴い、その継承を実現するための一つの手段として文字文化が広く身に付けられていったのである。

近世後期には全国津々浦々に文字文化の浸透、教育環境の整備がなされ、手習熟など学習機会を提供する場が増大した。その結果、民衆の算筆能力の総体的な向上が見られた。その中で、文書主義、文字文化の主な担い手であり、村の代表者である村役人に対しても、要求される知的力量、算筆能力は変質していったと考えられる。では、いつ頃から、どのような能力・資質が求められるようになったのであろうか。

村役人の資質については、地域運営、文書管理、政策主体、政治能力、金融など多岐にわたる実務能力が明らかにされている¹⁾。そのなかでも、文字文化との関わりでは、久留島浩は実務経験とともに「役用秘書」などのマニュアルや公用書類の整備が行われていたことを指摘している。また、八鍬友広は、訴願知と手習本である日安往来物との関係に着目し、近世を通じて、実務的な手引書や義民物語などを通じた訴願や一揆に関する技術・文化が重層的に形成されていくことなど、興味深い指摘を行っている²⁾。

幕藩権力による地方支配では、惣代庄屋や大庄屋、取締役などの中間支配機構の政治的役割が解明されている³⁾。また、主に都市部においては、文書行政を代行する筆耕など専門的請負業者の存在が指摘されている⁴⁾。これら中間支配機構を含む行政システムにおける文書行政の仕組みやそれを運用する階層を明らかにすることは、地域社会に蓄積された力量を明らかにするだけでなく、地方支配そのものの構造を解明することにも繋がるのである。

一方、村役人層の資質・役割の見直しが進められるなかで、彼らの資質・教養の高さが前提として研究がなされている場合が多い⁵⁾。リテラシーの高さが強調されるが、どの程度実用的であったのか、使い熟せていたのかという実態面を明らかにする必要がある。さらに、村役人

-
- 1) 久留島浩『近世幕領の行政と組合村』(東京大学出版会、2002年)、安藤正人編著『記録史料の管理と文書館』(北海道大学図書刊行会、1996年)、谷川正道『近世民衆運動の展開』(高科書店、1994年)、藪田貫『国訴と百姓一揆の研究』(校倉書房、1992年)、平川新『紛争と世論』(東京大学出版会、1996年)、大塚英二『日本近世農村金融史の研究』(校倉書房、1996年)などが代表的な研究として挙げられる。
 - 2) 久留島浩『百姓と村の変質』(『岩波講座日本通史』第15巻近世5、岩波書店、1995年)、八鍬友広『近世民衆の教育と政治参加』(校倉書房、2001年)。
 - 3) 久留島浩『近世幕領の行政と組合村』(前掲註2参照)。志村洋・吉田伸之編『近世の地域と中間権力』(山川出版社、2011年)、籠橋俊光『近世藩領の地域社会と行政』(清文堂出版、2012年)、志村洋「近世後期の庄屋行政と地域的入用」(『日本史研究』第564号、2009年8月)、山崎善弘「近世後期における領主支配の実現と中間支配機構―畿内・近国清水領知・幕領の『取締役』制を素材として〔含 討論と反省〕」(『日本史研究』第475号、2002年3月)、野本禎司「旗本家の知行所支配行政の実現と『在役』」(大石学編『近世公文書論―公文書システムの形成と発展―』岩田書院、2008年)など。
 - 4) 富善一敏「文書作成請負業者と村社会―近世飛騨地域における筆工を事例として―」(高木俊輔・渡辺浩一編『日本近世史料学研究』北海道大学図書刊行会、2000年)、同「天草の筆者についての基礎的考察」(『本渡市古文書資料集 天領天草大庄屋木山家文書』第7巻、2002年)、塚本明「近世中期京都の町代機構の改編」(朝尾直弘教授退官記念会編『日本社会の史的構造 近世・近代』思文閣出版、1995年)など。
 - 5) 杉仁『近世の地域と在村文化』(吉川弘文館、2001年)、同『近世の在村文化と書物出版』(吉川弘文館、2009年)など。

個人の活動だけでなく、具体的な資質・教養の継承、再生産の方法について解明することが求められ、その際に全国各地で展開した地域教育との関係について問われる必要がある。

そこで本稿では、①村方騒動など非常時に追求される村役人の資質ではなく、平時において一般的・通時的に認識されていた資質について、その内容と変質の検討を行う。その際、思想家・篤農家と評された一部の知識人によって示された村役人像ではなく、広範に村役人自身や村民によって理解されていた共通認識の解明を目指す。②次に、村役人らに自覚された資質の再生産の方法について、文字文化、地域教育をキーワードに検討を行い、近世を通じて如何にその手段が変容したかを明らかにする。

特に、一つ目の課題を分析する手段として、村役人の跡役願書を素材として取り上げる。村役人跡役願書は、村役人が交代する際にほぼ必ず作成されるもので、徳川政権下を通じて継続的に作成され続けたものである。

文書主義の浸透した享保期以降、文書事務の激増とそれに伴う先例としての文書の蓄積・継承により、その書式・文言が定式化していった。そのように広い地域で普及し定式化された文書様式において、新たな文言が書き加えられるということには重要な意味があったと考える。本稿では、先述したような課題について考える素材として、村役人の跡役願書へ19世紀以降に新たに書き加えられた文言（本稿では“算筆文言⁶⁾”としておく）に注目し、その概要について検討を行う。算筆文言だけを追うことは一面的であるが、それに含まれる意味は重要であると考え、あえて算筆文言に注目して分析を行うこととする。

村役人に期待・要求された実務的な資質、特に算筆能力については、村方騒動や文書管理の分析を通じて検討されてきた。一方で、平時において全国的・一般的にどのように認識されていたのかということは、史料的制約によってほとんど解明されていない。本稿では、このような課題に対する史料的な資源開発を目指すものでもあり、これまであまり注目されてこなかった村役人跡役願書の算筆文言を取り上げて検討することとした。

1. 村役人の資質と“算筆文言”

（1）村役人跡役願書の算筆文言

ここでまず、村役人跡役願書に記される算筆文言について見てみたい。次の史料は、武蔵国埼玉郡八条領西袋村（埼玉県八潮市）名主役の跡役願書であり、文化4年（1807）8月に西袋村から代官早川八郎左衛門役所へ提出されたものである⁷⁾。

〔史料1〕（傍線は筆者註）

乍恐以書付奉願上候

一、武州埼玉郡西袋村年寄惣百姓一同奉申上候、当村名主平右衛門儀当六月廿日病死仕候二付、

6) 史料では「筆算」と書かれることが多いが、「筆算」は「読み書き」と同義語であるほか、「紙などの上に書いて行う計算」という語彙があるため、ここでは誤解を生じさせないためにも「算筆」に統一する。なお、史料を引用する場合は史料に記された文言を使用する。

7) 文化4年8月「名主跡役願書一札」（西袋小沢平吉家文書・137）、『八潮市史』史料編近世Ⅱ（八潮市役所、1987年）所収。

御訴申上候処、跡役相極可申旨被仰渡奉畏候、然処右平右衛門倅平太夫儀、算筆等も相応ニ致、殊ニ実体者ニ御座候ニ付、今般一同相談之上、跡役ニ奉願上候、万一平太夫儀御年貢引負等仕候ハ、惣百姓ニて引請弁上納可仕候条、何卒以御慈悲右願之通為仰付被下置候ハ、難有仕合ニ奉存候、以上

文化四卯年八月

(名主・年寄ほか五一名連印)

早川八郎左衛門様御役所

史料1では、前名主の平右衛門死去に伴って跡役を村内で相談した結果、倅の平太夫へ依頼することに決まったので、その旨を承認してもらいたいと代官所へ願ひ上げたものである。旗本知行所や藩領では役所より任命状が下されるが、幕領において代官所から発給された任命状のようなものは見付け出すことができず、村側からの届出を追認することで完了していたと考えられる。

徳川政権下を通じて、名主・組頭・百姓代の跡役願は作成・上申されており、下書きや写しが村側に残されている。それらを見ると、上記のように、跡役となる者の名前と続柄(家柄)、跡役選出に至った理由、選出方法、人物評価、何か問題が生じた場合には村中一同で責任をもって遂行すること、が記述されている。文言の細かな違いはあるが、この書式が通時的・広域的に普及していたことが確認でき、広く共有された形式であったことがわかる。

ここで問題としたいのが、跡役となる者の人物評価である。人物評価については、史料1にも記されている「殊ニ実体者」のほか、「平日身持宜敷実体」「至極実体ものにて御用向大切ニ相勤」など総合的な人格に関する文言がほぼ全ての跡役願書に共通して記されている。このような「実体」の人物であることを基本とし、家格、持ち高、性格などが加味される。その中で、ある時期から「算筆等も相応」という文言が書き加えられるようになったのである。

本稿では、このような跡役願書に記された算筆能力に関する文言を“算筆文言”と評価し、ある時期より期待された村役人の資質を体現する文言として重要な意義があると考え。特に後述する18世紀の史料には見ることでできない「ケ成」「相応」という高いレベルが要求されていることに注目したい。

(2) 算筆文言の傾向

では、村役人の跡役願書に記された算筆文言はどのくらい存在しているのであろうか。ここでは現在の埼玉県および東京都多摩地域の一部を対象に、自治体史誌の史料編の調査を行った。本来であれば史料群の悉皆的な調査が必要であるが、跡役願書はほぼ全ての自治体史誌で収録されており、通時的・広域的な傾向を把握することは可能と考える。また、対象地域は江戸近郊地域であり、支配が錯綜した非領国地域でもあるため、幕領・旗本知行所・藩領といった領主の差異についても確認することができる。そこで、埼玉県域については刊行された自治体史誌の史料編を調査し、それだけでは数量的に少ないと判断した地域については埼玉県立文書館に収蔵されている該当地域の史料群の調査を行った。また、東京都多摩地域については、小平市、国分寺市、東村山市、福生市、稲城市、調布市、武蔵野市を抽出して同じく自治体史誌の調査を行った。

この調査結果を一覧表にしたものが、表1①および表1②である。埼玉県域では算筆文言を含む跡役願書のみを掲載した。一方、多摩地域で取り上げた自治体史誌には比較的多くの跡役願書が収録されており、書式の推移、特に算筆文言がいつ頃より登場したのかが分かるように、算筆文言を含まないものも一覧表に取り上げることとした。

また、算筆文言が広域的に確認できる参考資料として、岡山藩領下の備前国児島郡黒石村組（岡山県倉敷市）の大庄屋黒石家の記録「御内意書上控」⁸⁾の中から、大庄屋より郡奉行へ提出された村役人跡役の上申書を抽出した一覧表（表1③）を挙げておく。この史料は、指名（世襲・見立て）や入札によって村役人選定を行った村側からの届け出（跡役願書）を受けて、人物・能力ともに相応しい人物であるから任命してもらいたいという内申を郡奉行所へ行った文書の控である。そのため、村から提出された村役人跡役とは異なるが、記されている内容や村側の意向を藩権力へ伝達するものであることから、同様のものとして扱うこととした。

結果的に言うと、村役人跡役願書における算筆文言は19世紀以降の広範な地域で確認できるが、詳細に見ると、a地域（支配など）、b年代、c書き手（地域内での違い）、d差出先、e選出方法（世襲や入札など）によって有無の差異が生じていることが明らかとなった。

武蔵国の事例を見て顕著なのは、算筆文言が見られるのはほぼ幕領に限られているということである。なぜ幕領に限られているのかは不明であるが、幕領でも書かれている地域とそうでないところがあり、代官による区別も無いことから、代官所より明確な指示があったとは考えにくい。また、現在の埼玉県西部・北部では、管見の限り全くとって良いほど確認することができない。その反面、岡山藩領でも算筆文言の継続的な使用が確認できることから、領主に拘わらず全国的な広がりをもっていることがわかる。そのため、領主の違いだけでなく、地域的な特性があると考えられ、地方支配構造や町村政組織の差異などと併せて検討する必要がある。この点の解明についてはより広範囲で悉皆的な調査を行わなければならない、今後の課題としておく。

岡山藩領の黒石村組の記録には、既に名主の者が兼帯する場合や一度離職していた者が復帰する場合を除き、文政4年（1821）から安政2年（1855）までの35年間で、新任の村役人就任の内申が69件収録されている。岡山藩の地方支配は、二十数ヶ村ごとに大庄屋が管轄し、そのもとで各村に名主一五人組頭一判頭という村役人が置かれた。その内申には「書算等相応仕」など武蔵国と同一とって良い算筆文言が2件を除いて確認することができ、19世紀には算筆文言が定式化していたことがわかる。

ちなみに、旗本牧野家領知では「御用村用共無差支相勤候者」という文言が良く使用されており⁹⁾、支配領主ごとに独自の統一規格が存在していたと考えられ、単純に算筆文言の有無だけでは判断できないことを考慮する必要もある。また、旗本知行所や藩領では役所と村役人との関係が強く、人物評価に拘わらず、世襲や前名主の推薦した人物がそのまま任命されることも少なくない。

旗本知行所へ提出された跡役願書に算筆文言が確認できるのは高麗郡膝折村（埼玉県鶴ヶ島市）の1例であるが、このケースは幕領との相給で、幕領分の名主が知行所分も兼帯するとい

8) 『倉敷市史』第8冊（名著出版、1973年）。

9) 『上尾市史』第3巻近世2（上尾市、1995年）、『桶川市史』第4巻近世資料編（桶川市役所、1982年）。

表1① 武蔵国北部(埼玉県域)における算筆文言

国郡名	村名	現在地	年代	跡役	算筆文言	種別	差出	宛先	支配	出典
埼玉郡	西袋村	八潮市	文化4年	名主/伴	算筆等も相応二致	願書	跡役・村役人・村中	早川八郎左衛門役所	幕領	八潮市史
埼玉郡	上馬場村	八潮市	文政10年	名主/伴	算筆等も相応相成	願書	村役人・村中	平岩右衛門役所	幕領	八潮市史
埼玉郡	道口蛭田村	春日部市	天保13年	名主見習/名主伴	仮成算筆等出来	願書	見習・村役人・村中	関保右衛門役所	幕領	春日部市史
足立郡	篠栗村	草加市	慶応2年	名主/伴	算筆等も可成出来	願書	跡役・村役人・村中	佐々井半十郎役所	幕領	草加市史
葛飾郡	上口村	三郷市	嘉永4年	名主見習/名主伴	算筆等も出来仕	願証文	村中	名主見習利兵衛	幕領	三郷市史
葛飾郡	加藤村	吉川市	嘉永5年	年寄/村民	算筆等も相応二出来	願書	跡役・村役人・村中	斉藤嘉兵衛役所	幕領	吉川市史
足立郡	原馬室村	鴻巣市	天保2年	名主/組頭	算筆等も相応二仕	願書	村中		幕領	鴻巣市史
足立郡	原馬室村	鴻巣市	天保5年	組頭/村民	算筆并御用向等相動	願証文	村中		幕領	藤井家文書433
足立郡	原馬室村	鴻巣市	天保12年	組頭/村民	算筆等も相応二仕	願書	村役人・村中(後欠)	(後欠)	幕領	藤井家文書462
足立郡	原馬室村	鴻巣市	安政4年	組頭4名、名主見習	算筆相応二仕	願書	村役人・村中		幕領	藤井家文書264
足立郡	堤崎村	上尾市	慶応元年	組頭/伴	算筆等もケ成二出来	願書	跡役・村役人・村中	松村忠四郎役所	幕領	上尾市史
足立郡	庄五郎新田	川口市	文化3年	名主/伴	算筆も相成	願書	跡役・村中	竹垣三右衛門役所	幕領	川口市史
足立郡	下戸山村	戸田市	文政9年	年寄/村民	算筆等もケ成二出来	願書	跡役・村役人	平岩右衛門役所	幕領	戸田市史
足立郡	下笹目村枝郷早瀬	戸田市	嘉永6年	年寄/村民	算筆等もケ成出来	願書	跡役・村役人・村中	勝田次郎役所	幕領	戸田市史
足立郡	蔵宿	蕨市	文化13年	名主/伴	算筆等も相応二仕	願書	跡役・村役人・村中	御代官様御名前御役所	幕領	蕨市史
賀美郡	毘沙吐村	上里町	明治4年	名主・組頭・百姓代	算筆等も出来仕	願書	跡役・村役人・村中	岩鼻頭役所	幕領	上里町史
高麗郡	藤金新田	鶴ヶ島市	弘化3年	名主兼帯/隣村名主	算筆等も出来	願書	跡役・村役人・村中	大熊善太郎役所	幕領	鶴ヶ島市史
高麗郡	下新田	鶴ヶ島市	弘化3年	名主兼帯/隣村名主	算筆等も出来	願書	跡役・村役人・村中	大熊善太郎役所	幕領	鶴ヶ島市史
高麗郡	膝折村	鶴ヶ島市	嘉永2年	名主/孫	算筆等も出来	願書	跡役・村役人・村中	(藤本金田家)地頭所	旗本領	鶴ヶ島市史
高麗郡	下新田・藤金新田	鶴ヶ島市	嘉永2年	名主兼帯/隣村名主	算筆も出来	願書	跡役・村役人・村中	大熊善太郎役所	幕領	鶴ヶ島市史

*跡役：跡役選定の対象となった役職名、斜線の後ろは候補者の身分もしくは前任者との関係を記した。

*算筆文言：跡役願書に記された算筆文言。

*種別：「願証文」村民から跡役へ提出された文書 / 「願書」村民、村役人、跡役・見習・新役候補者より支配役所へ提出された文書。

*出典：「八潮市史」史料編近世Ⅰ(八潮市役所、1984年)、「八潮市史」史料編近世Ⅱ(八潮市役所、1987年)、「草加市史」資料編Ⅰ(草加市、1985年)、「三郷市史」第2巻近世史料編Ⅰ(三郷市、1990年)、「吉川市史」資料編近世(吉川市、2012年)、「春日部市史」近世史料編Ⅳ(春日部市長三枝安茂、1987年)、「上尾市史」第3巻近世2(上尾市、1995年)、「鴻巣市史」資料編3近世1(埼玉県鴻巣市、1993年)、「川口市史」近世資料編Ⅰ(川口市、1985年)、「戸田市史」資料編2近世1(戸田市、1983年)、「戸田市史」資料編3近世2(戸田市、1985年)、「新修蕨市史」資料編2近世(蕨市、1994年)、「上里町史」資料編(上里町、1992年)、「鶴ヶ島町史」近世資料編Ⅳ(鶴ヶ島町、1985年)。

*鴻馬室村の「藤井家文書」は埼玉県立文書館収蔵。

表1② 武蔵国多摩郡（一部地域）における算筆文言

小平市域

村名	年代	跡役	算筆文言	種別	差出	宛先	支配
小川村	天保12年	名主/伴	筆算もケ成出来	願書	村役人・村中	江川太郎左衛門役所	幕領
小川村	元治2年	名主/伴	筆算もケ成出来	願書	跡役・村役人・村中	江川太郎左衛門役所	幕領
小川新田	(寛政7年)	組頭/伴	なし	(不明)	名主		幕領
小川新田	(年未詳)	組頭/伴	筆算等も相応	願書	跡役・村役人・村中	韭山県役所	幕領
鈴木新田	嘉永3年	名主見習/名主伴	筆算等も被(ケカ)成出来	願書	跡役・村役人・村中	大熊善太郎役所	幕領
鈴木新田	万延元年	組頭/村民	筆算等も何(仮カ)成出来	願書	村中		幕領
鈴木新田	已	組頭/伴	筆算等も被(ケカ)成出来	願書			幕領
野中新田	慶応2年	名主/伴	可成筆算等も古(出カ)来	願書	村役人・村中	江川太郎左衛門役所	幕領
野中新田善左衛門組	明治3年	組頭/村民	筆算等もケ成并居	願書	跡役・村役人・村中	品川県役所	幕領
廻り田新田	文政3年	組頭/伴	なし	議定	村中	名主忠兵衛、百姓代八右衛門	幕領
廻り田新田	弘化4年	名主/弟	筆算等も被(ケカ)成出来	願書	跡役・村役人・村中	江川太郎左衛門役所	幕領

*【小平市史料集第18集 村の生活4】(小平市中央図書館、2006年)

国分寺市域

村名	年代	跡役	算筆文言	種別	差出	宛先	支配
国分寺村	明和2年	名主/年寄	なし	願書	跡役・村役人・村中	伊奈半左衛門役所	幕領
国分寺村	(文化3年)	組頭	なし	願書	跡役・村役人		幕領
国分寺村	文化12年	組頭/村民	なし	願書	跡役・村役人	大岡源右衛門役所	幕領
国分寺村	天保14年	組頭/伴	筆算等も相応ニ出来	願書	跡役・村役人・村中	大熊善太郎役所	幕領
国分寺村	嘉永5年	組頭/伴	筆算等もケ成出来	願書	跡役・村役人・村中	勝田次郎役所	幕領
国分寺村	嘉永5年	名主見習/名主伴	筆算等もケ成出来	願書	跡役・村役人・村中	勝田次郎役所	幕領
国分寺村	安政7年	名主/伴	筆算等もケ成出来	願書	跡役・村役人・村中	竹垣三右衛門役所	幕領
文久2年	文久2年	組頭/伴	筆算等もケ成出来	願書	跡役・村役人・村中	竹垣三右衛門役所	幕領
本多新田	文久2年	組頭/伴	なし	議定	村中	名主良助、役人衆中	幕領
本多新田	弘化4年	名主/組頭	なし	願書	村中	大熊善太郎	幕領
恋ヶ窪村	明治3年	名主/伴	なし	願書	跡役・村役人	品川県役所	幕領
恋ヶ窪村	明治3年	組頭/村民	筆算等もケ成出来	願書	村中	品川県役所	幕領
戸倉新田	天明8年	名主/伴	なし	願書	(後欠)	(後欠)	幕領
戸倉新田	文政5年	名主/伴	筆算等仕	願書	跡役・村役人・村中	中村八太夫役所	幕領
戸倉新田	嘉永元年	名主/伴	なし	願書	跡役・村役人・村中	江川太郎左衛門役所	幕領
戸倉新田	明治4年	組頭1名、百姓代1名/村民	なし	願書	村中	品川県役所	幕領
野中新田六左衛門組	嘉永7年	年寄2名/伴	筆算等も并居	願書	跡役・村役人・村中	江川太郎左衛門役所	幕領
野中新田六左衛門組	(年未詳)	名主/伴	筆算等もケ成并居	願書	跡役・村役人・村中	品川県役所	幕領
芋窪新田、中藤新田、上谷保新田	(年未詳)	名主/伴	筆算等も相応心掛	願書	跡役・村役人・村中	山本大膳役所	幕領

*【国分寺市史料集】(I) 村落状況・支配関係文書(国分寺市、1981年)

調布市域

村名	年代	跡役	算筆文言	種別	差出	宛先	支配
上飛田給村	文久2年	名主/伴	筆算等もケ成出来	願書	跡役・村役人・村中		幕領

*【調布市史研究資料VI 調布の近世史料】上(調布市、1987年)。

東村山市域

村名	年代	跡役	算筆文言	種別	差出	宛先	支配
廻り田村	元文3年	名主・養子	なし	願書	村中	宛先	(相給)
廻り田村	宝暦10年	細頭/当初候補者の伴	なし	願書	村役人・村中	富田吉右衛門用人衆中	私領
廻り田村	天保4年	名主・伴	なし	願書	村役人・村中	名主久兵衛	(相給)
野口村	天保3年	細頭/千人同心御養子	算筆等も相弁	願書	村中(後欠)	(後欠)	幕領
野口村	天保7年	名主・村民	算筆等も被(ケカ)成出来	願書	跡役・村役人・村中	山本大膳役所	幕領
久米川村	元治元年	細頭3名・年寄1名	算筆等も心懸罷在	願書	村役人・村中	江川太郎左衛門役所	幕領

*【東村山市史】8 資料編近世2 (東京都東村山市史、1999年)

福生市域

村名	年代	跡役	算筆文言	種別	差出	宛先	支配
熊川村	安永3年	名主	なし	願書	村役人・村中	宛先	(相給)
熊川村	寛政12年	名主・伴	なし	願書	村役人・村中	弥八郎	幕領
福生村	天保13年	名主・伴	算筆等も心懸罷在	願書	跡役・村役人・村中	伊奈友之助役所	幕領
福生村	嘉永3年	年寄・伴	算筆等も心懸罷在	願書	村役人・村中	江川太郎左衛門役所	幕領
福生村	安政2年	名主1名・年寄1名/伴	算筆等も心懸罷在	願書	村役人・村中	江川太郎左衛門役所	幕領
福生村	慶応4年	名主1名・年寄1名/伴	算筆等も心懸罷在	願書	村役人・村中		幕領
石畑村	文久3年	細頭/先名主御養子	算筆等もケ成弁居	願書	村役人・村中	江川太郎左衛門役所	幕領

*【福生市史】資料編近世1 (東京都福生市、1989年)

稲城市域

村名	年代	跡役	算筆文言	種別	差出	宛先	支配
百村	嘉永2年	細頭2名	なし	願書	村役人・村中	地面所役人中	旗本領
平尾村	安政4年	年寄2名/伴・村民	算筆等もケ成心掛	願書		江川太郎左衛門役所	幕領

*【稲城市史】資料編2 古代・中世・近世 (稲城市、1996年)

武蔵野市域

村名	年代	跡役	算筆文言	種別	差出	宛先	支配
境村	享和2年	名主・伴	算筆等も可成二仕	願書	村役人・村中	伊奈助右衛門役所	幕領
境村	天保8年	名主・伴	可成算筆仕	議定	跡役・村役人・立会人		幕領
境新田	嘉永5年	年寄・伴	なし	願書	役人惣代	高倉住之助役所	幕領
境村	嘉永5年	年寄・伴	算筆等もケ成出来	願書	跡役・村役人・村中		幕領
境新田	嘉永5年	年寄・伴	算筆等もケ成出来	願書	跡役・村役人・村中	勝田次郎役所	幕領
境村	嘉永5年	年寄・伴	算筆等もケ成出来	願書	跡役・村役人・村中	勝田次郎役所	幕領
境新田	嘉永5年	細頭/百姓代伴	算筆等もケ成出来	願書	村役人・村中	勝田次郎役所	幕領
境新田	嘉永5年	年寄/百姓代	なし	願書	村中	勝田次郎役所	幕領
境前新田	(年未詳)	年寄2名/伴・百姓代	算筆等もケ成出来	願書	跡役・村役人・村中	松村忠四郎役所	幕領
吉祥寺村	明治3年	年寄/村民	なし	願書	跡役	品川県役所	幕領
吉祥寺村	明治4年	名主・伴	算筆等も間に合	願書	村役人・村中	品川県役所	幕領

*【武蔵野市史】資料編3 (武蔵野市、1986年)、【武蔵野市史】資料編4 井口家文書1 (武蔵野市、1987年)、【武蔵野市史】資料編11 境・秋本家文書2 (武蔵野市、2007年)。

表1③ 岡山藩領黒石組の算筆文言

	村名	年代	役職	選出	算筆文言	跡役身分
1	浦田村	文政4年2月	名主	入札	書算等仕	五人組頭
2	天城村	文政6年6月	五人組頭	入札	書算共相応仕	判頭
3	藤戸村	文政8年4月	名主2名	入札	書算等相応仕	名主格、前名主倅
4	粒江村	文政8年9月	名主2名	(指名)	書算等も相応仕	五人組頭、天城村名主兼帯
5	粒江村	文政8年10月	五人組頭2名	入札	書算共相応仕	判頭、判頭
6	福田新田	文政9年12月	五人組頭	入札	書算等相応仕	判頭
7	天城村	文政10年正月	名主	(指名)	書算等相応仕	五人組頭
8	天城村	文政10年3月	五人組頭	入札	書算等相応仕	判頭
9	黒石村	文政10年8月	名主	入札	書算等能仕	大庄屋養子
10	浦田村	文政11年2月	名主	入札	書算等相応仕	前名主倅
11	天城村	文政13年閏3月	名主	入札	書算等相応仕	町分判頭
12	粒浦	天保2年3月	五人組頭2名	入札	書算等相応仕	村民、村民
13	田之口村	天保2年正月	名主	(指名)	書算等能仕	名主養子
14	串田村	天保2年11月	五人組頭	世襲	書算等相応仕	倅
15	興除新田曾根	天保3年8月	五人組頭2名	入札	書算等相応仕	判頭、判頭
16	八軒屋	天保3年9月	五人組頭	入札	書算等相応仕	前五人組頭倅
17	粒江村	天保4年4月	名主	世襲	書算等相応仕	倅
18	福田村	天保4年5月	名主	世襲	書算等相応仕	養子
19	興除新田東隣	天保4年9月	名主	(指名)	書算等相応仕	五人組頭
20	興除新田西隣	天保4年9月	名主	(指名)	書算等相応仕	天城村五人組頭倅
21	福田村	天保5年2月	名主	(指名)	書算共相応仕	五人組頭
22	福江村	天保5年2月	名主	入札	書算等相応仕	村民
23	興除新田東隣	天保5年5月	五人組頭	(指名)	書算等相応仕	判頭
24	会原村	天保5年5月	五人組頭	世襲	書算等相応仕	倅
25	興除新田中隣	天保6年2月	名主	(指名)	書算共相応仕	五人組頭
26	興除新田内尾	天保6年2月	五人組頭	(指名)	書算等も相応仕	判頭
27	興除新田中隣	天保6年4月	五人組頭	(指名)	書算等も相応仕	判頭
28	粒江村	天保6年4月	名主	世襲	書算等相応仕	倅
29	福田村	天保6年7月	五人組頭	(指名)	書算共相応仕	村民
30	広江村	天保7年4月	名主	入札	書算等相応仕	村民
31	広江村	天保7年12月	五人組頭	入札	書算等相応仕	判頭
32	黒石村	天保8年6月	五人組頭	入札	書算等相応仕	前五人組頭倅
33	福田村	天保8年8月	名主	世襲	書算等相応仕	倅
34	黒石村	天保8年9月	名主	入札	書算等能仕	村民
35	串田村	天保9年2月	名主	世襲	書算等相応仕	会原村名主倅
36	福田新田	天保9年10月	名主	世襲	書算等相応仕	養子
37	広江村	天保9年10月	名主	(指名)	書算等も相応仕	大庄屋格倅（福田新田）
38	粒浦	天保10年11月	五人組頭	入札	書算等相応仕	前五人組頭倅
39	会原村	天保10年11月	五人組頭	入札	書算等相応仕	判頭
40	広江村	天保11年2月	五人組頭	入札	書算等相応仕	前五人組頭倅
41	福田村	天保11年8月	名主	世襲	書算等相応仕	倅
42	福江村	天保12年4月	五人組頭	世襲	書算等相応仕	倅
43	藤戸村	天保12年4月	五人組頭	世襲	書算等能仕	倅
44	串田村・会原村	天保13年3月	名主（兼帯）	世襲	書算等相応仕	養子
45	天城村	天保13年7月	五人組頭	入札	書算等相応仕	前五人組頭倅
46	福田新田	天保13年7月	五人組頭	世襲	書算等相応仕	倅
47	粒浦	天保13年9月	名主	入札	書算等能仕	五人組頭
48	藤戸村	天保13年9月	名主	世襲	書算等相応仕	倅
49	福田新田	天保14年11月	五人組頭2名	入札	書算等相応仕	判頭、判頭
50	串田村	天保15年2月	名主	世襲	書算等相応仕	養子
51	粒浦	天保15年8月	名主	世襲	書算等相応仕	前名主倅

52	粒浦	天保15年11月	五人組頭2名	入札	書算等相応仕	村民、村民
53	八軒屋	弘化2年正月	名主	(指名)	書算等も能仕	大庄屋倅(八軒屋)
54	福田新田	弘化2年9月	名主	世襲	書算等相応仕	倅
55	天城村	弘化3年5月	五人組頭	入札	書算等相応仕	判頭
56	黒石村	弘化2年正月	名主	世襲	書算等相応仕	倅
57	福江村	弘化4年2月	五人組頭	世襲	書算等相応仕	倅
58	藤戸村	嘉永2年10月	名主	(指名)	なし	大庄屋養子(藤戸村)
59	藤戸村	嘉永2年10月	五人組頭	世襲	書算等能仕	倅
60	粒江村	嘉永4年7月	名主	世襲	書算等相応仕	倅
61	粒江村	嘉永4年10月	五人組頭	(指名)	書算等相応仕	村民倅
62	天城村	嘉永5年3月	五人組頭	入札	書算等相応仕	大判頭
63	天城村	嘉永5年3月	大判頭	(指名)	なし	判頭
64	粒江村	嘉永5年9月	名主	世襲	書算等相応仕	倅
65	粒江村	嘉永6年3月	名主	世襲	書算等能仕	天城村名主倅
66	天城村	嘉永6年10月	五人組頭	入札	なし	大判頭
67	会原村	安政元年2月	五人組頭	入札	書算等相応仕	前五人組頭倅
68	天城村	安政2年3月	名主	(指名)	書算等能仕	粒江村名主(赤城村)
69	福田古新田	安政2年4月	五人組頭	世襲	書算等能仕	倅

* 入札による選出の場合は「入札」、特に選出方法に関する記述がない場合は「(指名)」、倅・養子等へ直接継承された場合は「世襲」とした。但し、実質的に世襲の場合であっても入札が行われた場合は「入札」とした。

* 前役の退役と同時に倅・養子等へ継承される場合は「倅」「養子」等とし、前役の退役後に一定の閑役期間を経て倅・養子等へ継承された場合は「前名主倅」等とした。跡役の者の肩書きについて記述がない場合は「村民」とした。

うものであった¹⁰⁾。代官所へも兼帯することの承諾が採られていることから、何らかの影響を受けていた可能性もある。

次に、書かれ始めた時期であるが、早い地域では享和・文化期より見られ、天保期には広く普及するようになり、それ以降は継続して書かれるようになっていることがわかる。19世紀以降、全体的に算筆文言が意識され始めたが、必ずしも絶対に記されるもの、記さなければならぬものというものではなかったこともわかる。村役人の交代時に作成されるため、年代に幅が生じてしまうことも考慮する必要があるが、大凡の傾向を把握することが可能である。また、先例が重視されたため、基本的には過去の跡役願書を踏襲して作成されるが、あえて算筆文言を記さなかった場合も多くはないが存在する。その理由も現在のところ明確ではないが、理由の一つとして考えられるのが書き手の違いということになる。

差出先を見ると、数例の頼証文以外は支配役所へ提出される願書(届書)であることがわかる。先に示した武蔵国埼玉郡西袋村名主の小澤平太夫豊功の事例を見ると、代官早川八郎左衛門役所へ提出された跡役願書には算筆文言が記されているが、村民から豊功本人へ差し出された頼証文には記されていない。このようなケースは他地域でも確認でき、支配役所に対しては、跡役に選出された人物が相応な人物であることを認めさせねばならないため、算筆文言を記す必要があったと考えられる。後述するように、領主層においても村役人の算筆能力の必要性は認識され、跡役承認の際に確認する要素と考えられていた。

最後に、跡役を選出方法による違いである。表1で示した武蔵国の事例では、72名(57件)の跡役願書で算筆文言が見られる。内訳は、世襲35名、指名30名、入札7名である。つまり、

10) 『鶴ヶ島町史』近世資料編Ⅳ(鶴ヶ島町、1985年)。

算筆文言は村民の意志が直接的には反映されない平時の村役人交替時に記されるものと判断できる。なぜ、世襲や指名（見立て）による選出の際に記されるのであろうか。

村方騒動を経て入札による選出が一般化されたところでは、跡役は高札（一番札）の者となり、必然的に村民の意志が反映されるため、改めて算筆文言が跡役願書に記されることはほとんどない。入札の段階で算筆能力が期待できる人物へ投票するためである。岡山藩の事例では、村側からの跡役願いを受けて藩権力に内申が行われるため、指名・世襲や入札の違いはなく一律に算筆文言が書かれたと考えられる。

但し、算筆能力の有無によって、入札の結果が覆されてしまう場合もあった。例えば、天保2年（1831）12月に武蔵国足立郡原馬室村（埼玉県鴻巣市）では、前名主の死去後しばらく組頭6名で村政を取り仕切ってきたが、定役の名主を設置することが村方一同の相談で決まり、入札が行われることとなった¹¹⁾。入札の結果、一番札は組頭伊平次であったが、惣百姓らが相談したところ、二番札の組頭健次郎は「株舗相応にて小前気請も宜敷、殊ニ筆算等も相応ニ仕」る人物であるため、健次郎を名主役としたい旨を代官へ願い上げている。なお、この入札に関しては、原馬室村七拾五人惣代百姓佐五右衛門と新助の2名より、不正があったことと組頭伊平次の非行行為が代官所へ上申されている。そこに記された伊平治の人物評価は「多分之借財金御座候風聞も前々より承り」、「平生大酒好ミ」、「酒狂之上にて悪口雑言等ヲ申募り」という状態で、有徳で算筆能力を有することが理想とされる村役人像とは正反対の姿が強調されている。

原馬室村では同5年の組頭役の選出においても村内で意見が分かれ、「組高持殊ニ筆算并御用向等相勤り候人体」ということを理由に、一部の村民が独自に頼証文を出すに至っている¹²⁾。

また、明治4年（1871）2月の毘沙吐村（埼玉県上里町）の村役人入撰では、名主1名・組頭2名・百姓代1名を新たに入札で選出したが、岩鼻県役所へ提出した跡役願書には改めて「平常実直にて筆算等も出来仕候」者たちで問題は無いということを記している¹³⁾。

入札制度は、票の取り纏めや代筆、規定を満たした村民に限定されるなどの制約もあったが、村方騒動などを経て獲得された村政民主化の代表例のようなものであった。一方で、岡山藩領での村役人選任過程を検討した定兼学は、入札はあくまでも指標に過ぎない「民意」をくみ取るポーズであり、村の名主や五人組頭の意向が尊重されたことを指摘している¹⁴⁾。

本稿で挙げた事例からは、まがりなりにも村民の意志を反映した入札においても、算筆能力の有無によって覆されることとなったことがわかる。つまり、村役人選任においては算筆能力の有無が重要な要素と考えられ、支配権力をも納得させるだけの正当性のあるもの、優先されるものと認識されていたことを示しているといえよう。

（3）支配権力の認識

領主側は、村役人の資質についてどのように認識していたのであろうか。ここでは、近世の

11) 『鴻巣市史』資料編3 近世1（埼玉県鴻巣市、1993年）。

12) 天保5年12月「相頼申一札之事」（藤井家文書・344、埼玉県立文書館収蔵）。

13) 『上里町史』資料編（上里町、1992年）。

14) 定兼学「岡山藩における村役人選任をめぐる」（久留島浩・吉田伸之編『近世の社会的権力—権威とヘゲモニー—』山川出版社、1996年）。

代表的な地方書である『民間省要』と『地方凡例録』を確認しておくこととする¹⁵⁾。

まず、東海道川崎宿の名主・本陣・問屋役を勤めた田中休偶が、自身の長年の経験に基づきながら経世論をまとめた著書である『民間省要』(享保6年自序)のなかで、名主役のあるべき姿について記している。

[史料2]

近年私領・寺社領ニ多渡りて村々数多二分レ、俄名主多出来たるニより、無筆の輩、心ならず名主・庄屋と成も多し。

(中 略)

凡ソ村々の内ニ能キ名主・庄屋と言ハ、先自身質朴ニして常ニ産業を守り、内の備へを堅くして更ニ外の物を食ル心なく、我より下の者を憐ミ、扱公用を大切に¹⁶⁾して官ニよくつかへ、所の掟ニぬけめなく、文筆暗からず、何事ニも私なく直を以人を遣ひなづけ、威有て猛からぬ。是を上品の品といはん。

全体を通して被支配者の立場から地方役人などの不正を非難し、地域社会の実情や民情を理解して地方支配が行われるべきであることを説いている。ここでは、地方役人による不正や無駄な出費のために諸事・村入用が多く掛かってしまうが、その全ては名主の責任として村民から追求され、「上をおそれ下をかへり見て、己が身の言分ケをひかへ居るのミ」という板挟みで言い訳もできない名主の実情を指摘し、安定的な地方支配のためにもきちんとした人物を任命する必要性が指摘されている。

次の『地方凡例録』は、上州高崎藩の郡奉行であった大石久敬がまとめた地方書である。寛政6年(1794)跋文が記されているが、未完のままであるという。封建社会の基盤となる農政全般にわたり詳細に解説を加えた手引書であり、地方支配の担当者や村役人らの実務参考書となるものであった。

ここで、『地方凡例録』巻之七上に収載された「庄屋名主濫觴之事」から、名主役・組頭役選出の際の心得について記した部分を引用しておく。

[史料3] (傍線は筆者註)

【名主】

跡役を極めることは、前々其村々の郷例に任せ、総百姓入札にて高札の者に申付るもあり、或は総百姓連印を以て願出るもあり、勿論年番持の名主は願入札等にも及ばず、順番の者之を勤む、年番にてなく一代限りの名主退役の時、其子役儀を勤むべき年齢人品にて、村中存付も宜しければ、総百姓相談の上、直に先名主の倅を願ふもあり、又入札願出たる者にても、其者の持高平日の行状算筆等の儀を役所に於て篤と穿鑿し、弥々勤まるべき者ならば申付、仮令高札なりとも、勤る間敷者ならば、入札の者どもへ理解を申論し、二番札に申付るとも、又は入札を仕直すとも致すべし

15) 村上直校訂『新訂民間省要』(有隣堂、1996年)、大石慎三郎校訂『地方凡例録』下巻(東京堂出版、1995年)。

【組頭】

組頭と云は、元来五人組の頭分を致し、今は百姓の内筆算致し、人品宜く、高も相応に持ち用立つべき者を、村の大小に依て五人三人充、入札か又は総百姓相談等にて極め置、名主の下役にして領主地頭の用弁并に村用をも勤む、又病氣か或は何ぞ子細ありて退役致さすれば、又外の者を見立て勤めさする（中略）尤も組頭役は願ひ出るに及ばずといへども、村方にて取締役所へは届を出すことなり

ここには、村における名主役・組頭役の概要が端的に示されている。大石久敬は領主から編纂の命を受け、当時既に編纂されていた地方書などの参考図書を求めて調査し、特に幕府代官辻六郎左衛門『地方要集録』（享保年間成立）と小宮山奎之進『田園類説』について吟味したという¹⁶⁾。つまり、幕府の地方制度を中心に、当時の全国的に普及していた地方支配の理念、常識をまとめたものといつてよいであろう。実際に代官も所持しており、地方支配の参考とされていたといえる。

前述したように、徳川政権は兵農分離のもとでの村請制を基盤としているため、村役人の算筆能力を前提としていた。近世初期より年貢割付等で不正がないよう法令等が出されていたが、次第に幕府・領主側において期待される村役人像が明確に示されるようになってきたといえる。

（４）求められる村役人像の変化

では、求められる村役人の資質、算筆能力とはどのようなものであったのだろうか。前述したように、村を最小の行政単位とする村請制においては、実務能力を有する村役人の存在が前提となっていた。そのため、一定の家柄や持ち高、本人の品性といった有徳の人物であるとともに、実務を遂行する能力、算筆能力は必要不可欠なのであったのである。一方、村役人に期待される資質・能力は、地域社会の抱える課題とともに変質していったと推察され、その変化を体現したものが算筆文言と考えている。特に、19世紀初頭より領主への跡役願書に算筆文言が記されるようになること、それまで地方書や村議定などに記された「算筆等」とは異なり、「筆算等」や「成出来」「算筆等相応ニ出来」と高いレベルの算筆能力が求められていることに大きな画期があると考えられる。

そこで、まずは跡役願書に算筆文言が記されるようになる以前、どのような算筆能力が求められたのかについて見てみたい。

① 19世紀以前の村役人に求められた算筆能力 まず、跡役願書に算筆文言が見られ始める19世紀より以前、村役人に求められた算筆能力がどのようなものであったのか、特に「算筆」という文言の意味の変化に注目して見てみたい。

常陸国筑波郡將監新田（茨城県筑波郡伊奈町）で宝永元年（1704）に発生した別名主取立訴訟では、名主役を年番で勤めていた本村の組頭2名が「無筆無算ニて御川難相勤」ことを罷免の理由として挙げている。差し支える御用とは具体的に、差し迫った夏成御年貢の割合や上納

16) 辻鶴翁「地方要集録」（小野武雄編『日本農民史料聚粹』第11巻、1970年復刻版）、小宮山奎之進「田園類説」（滝本誠一編『日本経済大典』第13巻、史誌出版社、1928年）。両書とも村役人の算筆能力については触れられていない。

が滞ることと記している。代官所に別名主の取り立てを訴えていることから、代官の地方支配との関係で組頭の無力が語られているといえるが、この時期に認識されていた村役人に期待される資質とは、百姓成立や年貢・諸役の上納を滞りなく遂行することを指していたと考えられる¹⁷⁾。

明和2年(1765)8月、武蔵国比企郡平村(埼玉県都幾川村)奥畑組で発生した村役人と惣百姓との一件では、御用国役金の割合や御用炭賃銭の割合、年貢・上納物等の割り付けなどに際し、名主が小前に対して帳面を押し隠したことが問題とされた。この内済証文¹⁸⁾では、今後は割付を惣百姓が確認し、年貢受取書は小前取立帳面へ押切印を致し、請取書を差し出すことが取り決められた。そこには、「諸勘定合之砌は名主年寄百姓代筆算相成候者五六人宛立合之上、勘定仕候筈相極申候」とあり、「筆算相成候者」と年貢勘定がイコールで考えられているといえよう。

また、本稿で対象とした地域とは離れるが、明和4年12月播磨国多可郡奥畑村(兵庫県西脇市)における庄屋役交代に際して取り決められた「一札之事」¹⁹⁾には、その第一条に「庄屋退役之後二至、前年之御免割勘定等先庄屋方にて仕候二、先庄屋家内之者筆算之用役二達候人幾人立会候ても、日雇賃銀不取立、壹日壹人八合宛之夫持方米取立可申事」とある。庄屋の資質を問うたものではないが、「筆算之用役二達」つ人物とは、年貢勘定がきちんとできる人ということを意味していることがわかる。

近世前・中期の村方騒動では、村役人の不正、特に年貢や諸役の割合勘定の不公平が問題とされ、公正に行われたかどうかを惣百姓が監視する体制が村方騒動などを通じて創られていった。18世紀後半以降の村方騒動では、村政民主化闘争と評されるように、村政をめぐる村役人の不正追及が主な焦点となる。その中で、村入用や年貢割合の立ち会いと帳簿の公開、年番名主制や入札による村役人選出といった村民の村政参加が実現されていった。幕府や領主も法令等で村役人らの不正を厳しく取り締まっており、実際に必要であった算筆能力は別として、村内で問われた算筆能力、村役人に期待された算筆能力という面について見ると、領主の地方支配の遂行といった基本的な村政運営であり、年貢や諸役、村入用の算用を公正に遂行する能力であったといえよう。

ii 意識される村役人像 19世紀になると、教養を身につけて思想家・篤農家などとして活動した村役人らによって、理想とする村役人像が示されるようになる。例を挙げると、下総国市原郡引田村(千葉県市川市)の名主である立野良道は、子孫に残した「役儀家言」(文久3年)の中で、「役儀を請けなば、まず役向の諸帳面、その数多き中に、御定め割符帳、御年貢勘定帳などはじめ専用の帳面をくり返し熟覧し、猶また算を入れて取調べ、次には村内前々の論所、他村境などの証拠の書物、絵図面をとくと見置べきなり、委しく記憶せれば、事ある時、当座の差支えはいうもさらなり」²⁰⁾と記している。また、下総国香取郡松沢村(千葉県干潟町)の宮負定雄は『民家要術』において、「村長といへば唯年貢を集めて上に納める事のみを職分の様

17) 高橋実『助郷一揆の研究』(岩田書院、2003年)。

18) 『都幾川村史資料』4(1)近世編平地区1(都幾川村、1993年)。

19) 『兵庫県史』史料編近世2(兵庫県、1990年)。

20) 『市原市史』資料編近世2(市原市、1998年)。

に心得て、村の政事を等閑に為し、一向己が利欲にのみ力を入れて、小百姓どもの無頼不法法になり往くをも往きなりに捨て置いて更に構わず、教諭せずして甚不経済なる名主も多かり」²¹⁾と述べ、年貢を納めるだけで村の政事を疎かにする名主が多くなっている現状を批判的に捉えている。

享保期以降、文書主義の浸透と、文書行政によって作成・授受・蓄積された文書類は膨大な量にのぼり、その適切な管理と効果的・合理的な活用が村役人の重要な職務となっていた。頻発した他村との訴訟や幕府・支配領主への訴願では、証拠書物となる文書を把握して迅速かつ効果的に対応し、村や地域の権益確保に努めなければならなかった。そのため、単に文書を管理するだけでなく、マニュアルとなる編纂物の作成も全国的に広く行われていたのである。

武蔵国多摩郡鈴木新田（東京都小平市）で文政7年（1824）に起こった訴訟では、内済証文のなかで村役人の筆算能力について触れられている²²⁾。組頭佐兵衛が「乱酒にて酒酔之上及乱防」び小前百姓が難儀していることが記されているが、訴訟内容の軸は組頭役の家柄である五郎兵衛が「役儀取戻」のために起こしたものである。その中で、広大な鈴木新田のなかで佐兵衛組は上鈴木新田と唱えるようなまとまりを有しており、御用・村用が多く「筆算等仕候者ニ無之ては役儀難相勤」と記されている。ここでは単に勘定や支配行政に最低限必要な識字能力ではなく、文字を使いこなせる人物が想定されている。高い教養を身に付け、様々な地域課題にも対応することのできる総合的な能力が求められていたといえよう。

鈴木新田での算筆文書の初見は嘉永3年（1850）の名主跡役願書であり、小平市域でも天保期が初見となっている。これらのことから、この地域では19世紀初頭には御用・村用の繁忙化に伴って、村役人の算筆能力が共通認識となっていたと考えられる。

村役人跡役願書で注目されるのは、算筆文言が記されたのは、世襲や村役人中による見立て（指名）で選出された人物であるということである。村政民主化の結果として入札制度の導入が図られた村もあるが、大半の村では基本的に世襲制が採られていた。そのため、わざわざ新たに算筆文言を書き加える必要はないと考えられるが、広い範囲で19世紀以降、算筆文言が見られるようになった。

特に多摩郡小川村（小平市）では、小川村の開発地主で、政治的・経済的にも大きな特権的地位を有していた土豪小川家に対しても、名主跡役願において算筆文言が明記されたのである。天保期以降、それまでの地主—小作関係を基盤とする小川家と村民との私的な関係が薄まり、小川家は客観的な位置に立つ名主へと変化したと評価されている²³⁾。つまり、小川家のような「家」であっても、従来通りの世襲制や特権的地位の確保が難しくなり、村民側の要求に応じていくことを余儀なくされたのである。そのような名主の変質が、跡役願書に算筆文言として顕れたと考える。

近世後期以降、文書主義や文字文化の浸透、教育環境の整備という社会状況のもとで、地域住民の文化的力量も総体的に向上したといえる。そのため、広域化・複雑化・多様化する地域

21) 山住正己・中江和恵編注『子育ての書』（平凡社、1976年）。

22) 文政7年4月「差上申済口証文之事」（鈴木家文書・D-7-10）、『小平市史料集第16集 村の生活2』（小平市中央図書館、2005年）。

23) 小酒井大悟「土豪開発新田の存立構造—武蔵国多摩郡小川村を素材として—」（『関東近世史研究』第74号、2013年11月）、『小平市史』近世編（小平市、2012年）。

社会のなかで、村民らが村役人に要求する力量も高まっていったと考えられる。村政民主化運動のなかで、広く村政への参加を実現していったが、現実問題として村政を担う村役人に就任するのは特定の「家」に限定されていた。村民は自らの権益を保持してくれる人材として、村役人にそれを実現する能力を求めたのである。

一方、村役人側も算筆能力の必要性を日々の地域運営のなかで実感しており、文書管理や編纂活動などによって知的力量の蓄積を図っていた。前述したように、当時の地方書や篤農家・思想家の著述、村役人家の家訓などにも明記され、資質・教養を身に付けることに努力が図られた。村役人側も資質に欠如があれば罷免にまで及ぶことを自覚しており、家格保持や「家」の永続のために努力を惜しまなかったのである。このように19世紀には筆算能力が幕府・領主、村役人、村民の間での共通認識であり、村役人就任に際しての合意事項となっていたと考えられる。

岡山藩領の事例のように一律で算筆文言が記されているのは、算筆能力の一般化を前提とした上で、跡役願書の新たな形式化がなされた結果といえる。

iv 算筆能力の合意形成 久留島浩は、地域社会が18世紀半ばを起点とし、19世紀前半を中心に年貢「村請」から御用「村請」へ変質すると指摘している²⁴⁾。村が行政組織としての活動を本格化していくことの結果であるとともに、そのことによって村役人の側もあるべき村役人像が設定されたという。先に挙げた下総国の立野や宮負ら篤農家・思想家の著述から、文書行政に習熟すること、年貢「村請」の名主ではなく、小百姓の生活にも配慮する行政「村請」の名主でなければならないことが自覚されていたことを指摘している。

村役人の資質は言うまでもなく算筆能力だけではなく、家柄・持ち高・品性といった有徳の人物や、実務など総合的な資質が要求される。一方、文書主義・文書行政の浸透、地域社会における文字文化の隆盛による知的力量のボトムアップのほか、複雑化・多様化・広域化する地域社会における様々な課題に対応する能力は、家柄・品性や実務経験だけでは対応することは困難であり、高い教養が必要となり、村民側からも強く要求された。その顕れが19世紀初頭から記されるようになった「筆算等ケ成出来」「筆算等相応相成」などの筆算文言であるということができる。つまり、筆算文言の登場や文言の変化（「ケ成」「相応」）は、久留島が指摘するような年貢「請負」から御用「請負」への変質の結果であるとともに、村役人に算筆能力を期待できるような一定の力量が蓄積され、発揮されていたという前提が形成されていたと理解することができる。

徳川政権発足から明治5年の村役人廃止までを通じて作成され続けた村役人跡役願書、いわば定式化された文書様式のなかで、新たに算筆文言が加えられたことの意義は大きいと考える。

本稿で検討した跡役願書は、領主、村役人、村民の間で共有された村役人の資質を再確認する場であり、三者の合意形成を示したものであるという意義があったと考えられる。この合意が破棄された場合、つまり能力の欠如が明らかになった場合、罷免の対象となるのである。また、実際の理由は別にあるとしても、算筆能力の欠如を理由とした場合、支配権力も村役人も罷免を認めざるを得なかったのである。

24) 久留島浩「百姓と村の変質」(『岩波講座日本通史』第15巻近世5、岩波書店、1995年)。

定兼学は岡山藩領の事例から、村役人新任時に藩権力と村内民衆との双方の合意を取り付ける必要があるが、入札という行為は最終的な信任と合意の確認作業であり、形式的であれ入札という行為が行われることで、村役人は村民に対しても責任を負うことを自覚させられたと指摘している²⁵⁾。

一方で、入札が行われない場合でも三者の合意形成が行われたはずであり、村役人跡役任命の際に一律に作成される跡役願書こそが合意形成の場であったと考える。

直接的に一般村民の意志が反映されない世襲や見立てによる村役人選任においても、跡役願書を通じて村民側の最低限の要求が盛り込まれ、合意形成が図られ保証されるようになっていたのである。

支配役所への願書に記される場合がほとんどを占める理由としては、村内の議定や跡役への頼証文よりも、より公的意味合いが大きく、三者が名を連ねる場であったからではないだろうか。この背景には、村民側が長い年月をかけて獲得してきた地位や権利、村社会の変化があったといえる。

2. 江戸町名主の跡役願書と資質

前節では、武蔵国郡村部や岡山藩領を対象に村役人跡役願書に記された算筆文言の検討を行った。本節では、算筆文言が広く一般化できる素材かどうかを確認するため、江戸の町名主を対象として比較検討を行う。

町名主の職務は大きく、触の伝達、人別改、火の元の取締、訴訟など紛議の解決、家屋敷の売買・譲渡、その他の証文案紙や書類を検閲・奥印することの五つであるといわれている²⁶⁾。17世紀中期以降、町政機構の整備とともに町名主の下には町代（のち書役）といった専従の町役人が制度化されるようになった。

また、江戸では地主の代理人である家主が中心となって五人組を結成し、五人組組員の中から毎月交代で町用・公用を務める月行事を出した。月行事の職務は、名主からの触の町内への伝達、町内訴訟・願届の加判、検使・見分の立会い、罪囚の保留、名主の指揮のもとでの火消人足の差配、喧嘩口論の仲裁、捨子・行倒れの世話、町内道路の修繕、火之番・夜回りなどであり、多岐にわたる町内に関する全ての町用・公用を務めた。

この月行事が執務のために詰めた町内の自身番屋には、月行事の補佐として書役がおかれ、実質的な町政運営を担っていた。もともとは町代が担っていたが、享保期の町政機構改革で廃止とされ、以後は名主支配の範囲内で物書（書役）の採用が認められた。

実質的な町政運営は「町の年寄」や「五人組」とよばれる家持や家主層が担い、算筆能力の体現者も彼らであったと考えられる。郡村部における地域運営構造とは差異も多く、特に草創名主や古町名主は町役人というよりも古い山緒をもつ名誉職であった。

25) 定兼学「岡山藩における村役人選任をめぐる」(前掲註16参照)。

26) 幸田成友「江戸の名主」(『幸田成友著作集』第1巻、中央公論社、1972年)、吉原健一郎『江戸選書4 江戸の町役人』(吉川弘文館、1980年)、西山松之助ほか編『江戸学事典』(弘文堂、1984年)ほか。

(1) 町名主の算筆能力と跡役願書

名主には世襲の者が多く、家職化されていた。退役する時には忝や養子に跡を継がせるように町人たちから願いあげており、余程の罪科が無ければ一代限りで退転ということはない。

跡役が決定するまでの手続きは、まず家持・家主から希望する人物の名前・年齢・前名主との関係、所有の家屋敷などを記した願書が町年寄役所へ提出される。草創名主に限り、前名主より願い出て、支配町人が連印することが認められていた。また、町奉行と代官の両支配の町の場合、代官所へ願い出て、代官の承認を受けた上で町年寄役所へ手附手代より照会状が出される。次に、町年寄役所から組合名主へ跡役となる人物の身元調査が指示され、その報告をもって町年寄が本人に面会し、書類に町年寄自身の意見を添えて町奉行所へ進達される。以上のような流れを辿るが、世襲の場合には町年寄の面会などは行われなかったという²⁷⁾。

江戸の町名主に関する直接的な史料群はほとんど残っておらず、名主跡役引き継ぎについて判明する史料も乏しい。旧幕府引継書にある「市中取締類集 名主取締之部」には、天保期の名主制度改革に伴って作成された名主取締に関する史料が収録されており、この時期の名主役の引き継ぎについても知ることができる。ここでは、天保期以降に限定されるが、「市中取締類集 名主取締之部」²⁸⁾を中心に、名主役を務めた「家」や人物の史料から検討してみたい。

村役人の場合と同様、算筆文言を一覧にしたものが表2である。天保期の町名主は250から260名存在したといわれており、それと比すると「市中取締類集」に収録された跡役願は天保から嘉永期までで63件と限られ、算筆文言があるものは3件と更に限られている。

なお、深川熊井町の熊井理左衛門と新吉原京町1丁目の甚四郎の2件については、前述の跡役就任手続きに関する一連の文書が収載されているので、算筆文言の記述がない場合でも参考のために加えてある。

年代は村名主同様に、天保期以降に記されるようになっている。書式も郡村部とほぼ同じ体裁・内容であり、江戸市中と周辺地域とで共通していたといえる。さらに、前述した岡山藩領でもほぼ共通しており、全国的に統一的な書式が普及していたと考えられる。

また、新吉原京町1丁目甚四郎の事例を見ると、町中から町年寄、町年寄から町奉行所というように上部の支配機関へ提出される願書には算筆文言が記されている。組合名主である同町2丁目の名主2名から差し出された文書には算筆文言が記されていないが、これは組合名主として人物に問題がないことを注進したもので、あえて書き加える必要がないと判断されたと思われる。また、4月に町年寄3名から奉行所へ提出されたものは、今回のケースと同じ見立てによる名主任命の先例を報告したもので、跡役願書とは異なる報告書である。

そのため、三者の合意形成の場としての跡役願書という位置づけは、郡村部と共通していると評価できる。但し、その数量が極端に少ないのが特徴である。

算筆能力については、町奉行所も明確に認識していた。天保14年(1843)4月に音羽町名主忠次郎の風聞を調査した町奉行所の隠密廻は、忠次郎について「身分生来実体成ものにて、筆算も仮成ニ出来、茶道相好候得共奢侈とは相聞不申」と報告している²⁹⁾。町側から提出される

27) 幸田成友「江戸の名主」(前掲註26参照)。

28) 『大日本近世史料 市中取締類集 名主取締之部』1～4(東京大学出版会、1965～69年)。

29) 『大日本近世史料 市中取締類集 名主取締之部』1(東京大学出版会、1965年)、310頁。

表2 江戸町名主の算筆文言

町名	氏名	年月日	算筆文言	差出	宛所
深川熊井町	熊井理左衛門	文化6年6月	なし	深川熊井町家主茂兵衛外一同、同所諸町同嘉兵衛外一同	町年寄衆御役所
		文化6年6月	なし	深川材木町名主市郎次外拾一人	町年寄衆御役所
		文化6年7月	なし	深川熊井町家主茂兵衛外一同、同所諸町同嘉兵衛外一同	町年寄衆御役所
		文化6年7月	なし	深川熊井町名主理左衛門、同所佐賀町組合名主藤右衛門	御番所様
		文化6年8月	なし	(深川漁師町之内 熊井町名主退役・跡役・家持町人ほか)	大貫次右衛門様御役所
深川相川町	藤次郎	天保3年11月	筆算等相応ニ仕	深川漁師町之内相川町家持17名、名主、見習願人	山田茂左衛門様御役所
音羽町	忠次郎	天保14年4月	筆算も仮成ニ出来	隠密廻	
			筆算も仮成ニ致	十四番組世話掛 小石川金杉水道町名主鈴木市郎右衛門、同所春日町同長左衛門、同所白山前町同房次郎	(町年寄樽藤左衛門)
新茶屋町	清十郎	天保14年11月	筆算等も仮成出来	世話掛取締役 堀江町名主熊井理左衛門、新材木町同石塚三九郎、長谷川町同鈴木市郎右衛門	(町年寄カ)
新吉原京町1丁目	萬四郎	弘化4年	筆算も相応ニ仕	新吉原京町壱丁目家持9名、家主9名、組合名主2名	町年寄役所
		弘化4年4月	なし	新吉原町名主佐兵衛、同庄兵衛	
		弘化4年4月	なし	町年寄喜多村彦右衛門、館市右衛門、樽藤左衛門	(北町奉行所カ)
		弘化4年6月	筆算も相応ニ仕	新吉原京町壱丁目家持10名、家主19名、組合名主2名	町年寄衆役所
		弘化4年7月	なし	(組合名主) 新吉原江戸式丁目名主佐兵衛、同所角町同庄兵衛	町年寄衆役所
		弘化4年7月	筆算も相応ニ仕	町年寄喜多村彦右衛門	(北町奉行所)

* 深川熊井町、深川相川町は『重宝録』第1（東京都、2000年）／音羽町、新茶屋町、新吉原町は『大日本近世史料 市中取締類集 名主取締之部』1～4（東京大学出版会、1965～69年）。

跡役願書の算筆文言と同様の人物評価となっており、このような人物が名主役の適任者であるということが共通認識となっていたことを窺うことができる。

一方、文化的な教養を有しているだけでは名主役に適任とは考えられていなかったことに注意する必要がある。例えば、西河岸町名主清右衛門の風聞を調査した隠密廻によると、「手跡能認、茶道を好、古物之目利等致し、所々権家え立入、世事無如才行届、人之思付能、殊ニ老分ニ付組合取用は宜候得共、御用弁は左程ニも無之、支配之氣受愚敷由ニ相聞申候」と報告されている³⁰⁾。手跡（筆道）は良く、茶道を好み、古物の目利きも良く致すという町名主に多い文化人・好事家である。世話が行き届いており、組合内での取り用いもよいが、御用弁はそれほどでなく、支配町内での町人の受けは良くないというものであった。

江戸の町名主は、前名主が罪を問われて免職となっても、跡役にはその忤が就任する場合も少なくなく、世襲が原則であった。また、月行事や書役などの実務遂行を支える人々が存在しており、実務能力が特段に要求されることもなかった。そのため、重視されたのは出自や問題

30) 『大日本近世史料 市中取締類集 名主取締之部』1（前掲註29参照）、58頁。

を起こさない人柄(実体なる人物)であり、算筆文言が記されることも少なかったと考えられる。

一方、組合持ちなど専任の名主が置かれずに断絶していた町などでは、町人らが世襲に限らず町内外より人物を選定して願い出ることがあり、このような見立名主の場合は適材であることを証明する人物評価が重要となる。

また、天保期に設置された市中取締掛や諸色取調掛といった掛名主の場合、改革政治を着実に遂行する能力が求められるため、それに任命された名主に対しては算筆能力など実務的な資質が求められたと考えられる。

郡村部と都市部との大きな差異は支配機構のあり方であり、武蔵国だけでなく日本全体の傾向を示しているといえる。

(2) 問われる算筆能力

では、どのような算筆能力が求められていたのでしょうか。19世紀以降の算筆文言に示される村役人の資質について、筆者は彼らによって作成された編纂物に注目して検討を行い、その社会的機能から「村の編纂物」と評価してきた³¹⁾。

この「村の編纂物」についてまとめると、i 日常的に作成・授受される文書や日誌類とは異なり、明確な目的意識のもと、情報(村内外の文書、書物、金石文、伝承など)の蒐集と精査を経て、個人・組織等によって一つの体系化された<知>としてまとめられたものである。これらは地域運営マニュアルと評価できるもので、いわば地域<知>の集約版・凝縮版といえるものである。ii 対領主関係においては支配行政の円滑化を図るとともに、地域の権益確保を実現するもので、地域内部においては地域の調整機能を果たす。iii 地域課題に基づいて諸情報に独自の解釈を加えて地域独自の論理を構成するもので、地域論理の再構築や諸事項の確定、地域秩序の再編に大きな役割を果たす。iv 「家」内部だけでなく地域社会(主に村役人層)における地域<知>の共有化、後世への確実な継承を可能とし、一定地域内での共通認識の形成を進めるものである。

地域<知>とは、近世地域社会において受容・形成・蓄積された多様な<知>のうち、支配や地域運営、地域の慣行や歴史、地理など、地域特有の事象に関する<知>をいい、地域社会の安定化に欠かせない知識・技術である。ここでは特に、多様な要素を含む地域<知>について、地域社会を政治面・経済面・文化面で牽引した村役人層の資質・能力という点に注目する。

つまり、 α 近世後期以降の多様化・複雑化・広域化する地域社会において、安定的な地域運営と地域住民の権益確保という責務を負った地域指導者層の資質を担保する【地域運営マニュアル】、 β その編纂作業による地域秩序の再確認・再構築や、流布を通じた共有化が進むことで地域秩序の再構築、共通認識の形成が図られ、地域認識の形成と共有化を可能とする【地域の記憶装置】という社会的機能を有するものである。

このような目的に応じて作成された編纂物は、町名主や商人らの史料群のなかにも少なから

31) 拙稿①「農村における編纂物とその社会的機能」(『一橋論叢』第134巻第4号、2005年10月)、同②「村落・地域社会の知的力量と『村の編纂物』—村役人層の資質形成と村方文書共有ネットワーク—」(大石学編『近世公文書論—公文書システムの形成と発展—』岩田書院、2008年11月)、同③「近世地域社会における蔵書とはなにか」(『国文学研究資料館紀要 アーカイブズ研究篇』第7号、2011年3月)、同④「近世蔵書文化論・試論」(東京学芸大学史学会『史海』第58号、2011年5月)。

ず確認でき、彼らの資質を体現するものとして広く編纂活動が行われていたことがわかる。筆者は19世紀以降に村役人や町名主に期待された算筆能力を体現するものとしてこの編纂物を考えている。

世話掛名主に任命されることとなった桶町名主藤五郎について、隠密廻が調査した人物評価が「市中取締類集 名主取締之部」に収録されている。その記述を見ると、「町用勤方宜敷、若年之頃より旧記書留等穿鑿いたし、組合内決兼候御用向有之節は、此ものえ相談いたし、組合内気受も宜敷ものにて、懸り役等も被仰付置候ものニ付、此度世話懸並被仰付候ハ、組合内若キもの共之励ニも相成可申哉ニ存候」³²⁾とある。藤五郎は若者にも拘わらず実務能力を備えていることが分かる。注目できるものとして、若い頃より「旧記書留」を穿鑿し、諸事町政のことを弁えていたということであり、先に示した編纂活動と同一なものといえよう。

次の史料は、江戸の本店である白子屋に伝来した「再興越後縮出稼人熟談仕法帳」³³⁾の記事を抜粋したものである。

越後縮は夏季に愛好された上等の麻織物で、武家から庶民まで広く着用された。この越後縮の江戸流通の主導権を巡り、地元や信州から縮荷を江戸や各地に売り捌いた縮出稼人たちと、嘉永期に再興の動きをみせていた江戸の呉服問屋仲間が対立することとなった。

一件の過程で作成・授受された証文類をまとめた編纂物には、朱書きで熊井利左衛門らの事務手続きの様子が記されている。

〔史料4〕

a 右之通相認六月十七日亀之尾席熊井氏え差出候得は、旧記書類取調持参致候様御談ニ付、同廿日寄合にて旧記取調候処、文化十一戌年縮一件済口対談為取替証文壱通并十組頭取杉本茂十郎え差出候享保之度より文化以前仕来始末書壱通右を持参、廿二日亀之尾え差出候。尤別紙口上之覚左之通相認相添差出申候。

b 右は六月廿二日旧記本書持参にて亀之尾え罷出候所、当日熊井氏御出勤無之、同廿七日尚又罷出入御覧ニ候得は慥成書類之由被申聞、右之写早々認メ当席え差出候様并前書伺書ハ西之内竪紙館役所之宛ニ書取、口上書ハ半紙竪帳ニ認メ、其外旧記書類写取差出候様御談ニ付、同廿九日亀之尾え差出置其段熊井氏え相届候得は承知いたし候段被申聞候并福嶋氏えも相届候事。

旧記之内文化十一戌年縮一件内済為取替証文は取用ニ不相成趣申立候ニ付此帳ニ控不申、享保後仕来之書物は已来取用ニ相成候様申立候ニ付

この史料については、天保改革期における惣名主上席の熊井理左衛門ら三名主の重要性を指摘した小林信也により、彼らの利害調整機能を検討する素材として取り上げられている³⁴⁾。本

32) 『大日本近世史料 市中取締類集 名主取締之部』2（東京大学出版会、1966年）、389頁。

33) 「式番再興越後縮出稼人熟談仕法帳」（白木屋文書、東京大学経済学部資料室収蔵）、林玲子・谷本雅之編『白木屋文書 諸問屋記録』（るはわ書房、2001年）に収録。

34) 小林信也『山川歴史モノグラフ1 江戸の民衆世界と近代化』（山川出版社、2002年）。

稿では、同じく関連史料を素材に嘉永期間屋仲間再興過程での江戸問屋や商人らの動向を検討した林玲子の研究³⁵⁾も併せて参考としつつ、町名主の文字文化を背景にした実務能力、“算筆能力”の事例としてこの場で指摘しておくこととする。

本町三丁目の水茶屋「亀の尾」では、諸問屋仲間再興令が出された嘉永5年(1852)3月以降、熊井理左衛門ら町名主や商人仲間の代表者らが寄り合い、仲間再興に関する調査が行われていた。

翌6年6月17日、出稼人が仕入元方を買ひ荒らすために価格が高騰しており、物価引き下げという再興令の趣旨に反するので取り締まってもらいたいという伺書が提出された。それを受けて熊井理左衛門らが旧記書類の提出を命じ、取り調べを行っていたことが史料からわかる。

熊井理左衛門は幕府から命じられた仕事をこなす能力も高く、また、組内の名主の中でもリーダーシップを発揮していたと評価されている。

位置づけも役割も異なる江戸の町名主と村役人であるが、跡役願書の書式や内容は同じであり、どちらも19世紀以降に「筆算等ケ成出来」という算筆文言が記されるようになることが注目される。幕府や支配領主から見れば、支配機構の末端に位置する地域行政の担当者という意味では同じであり、必要最低限の資質として共通していたといえる。また、村民・町民から見れば、自分たちの生活・生命を守り、權益確保を委託する代表者として同質であり、彼らに期待する資質もまた同様であったと考えられる。

3. 村役人の資質の再生産と地域教育

次に、このような村役人の資質がどのように養成され、再生産されたのかが問われよう。前述したが、村役人の資質の高さが強調され、前提とされて地域社会論が語られる場合が多い。しかし、期待される資質がどのように形成されたのか、そのような人材を如何に継続的に再生産できたのかということはほとんど明らかにされていない。実務経験や家庭内での養成だけでなく、地域としてどのような再生産システムを構築していったのかを解明する必要がある。

本節では、近世後期の特徴として、村役人の資質形成・実務能力の形成に“教育”が大きく関わり始め、その教材として先述の編纂物が使用されていたこと、地域指導者層の養成を目的に設立された郷学の意義について指摘しておきたい。

(1) 手習塾における資質形成

まず、跡役願書の事例としても引用した西袋村名主の小澤豊功が開設した手習塾「尚古堂」における教育内容について簡単に見ることとする³⁶⁾。

豊功は、天明6年(1786)に生まれ、寛政8年(1796)11歳の時に江戸日本橋横山町(東京都中央区)の宮井庄右衛門という手習塾師匠に入門したが、30日で江戸大門通り新大坂町(同)の佐々木周蔵の手習塾(書・算)へ移っている。それ以降は、江戸薬研堀(同)萩原大麓(儒

35) 林玲子『江戸問屋仲間の研究—幕藩体制下の都市商業資本—』(御茶の水書房、1967年)。

36) 小澤豊功「尚古堂」については、小澤正弘①「寺子屋尚古堂について」(『八潮市史研究』創刊号、1978年12月)、同②『八潮のふるさと新書Ⅰ 小澤豊功』(八潮市、2001年)、に詳しい。

学)、津田半兵衛(謡曲)にも就いて、一通りの学習を行った。寛政12年に帰村し、その直後から隣村の者へ手習用手本を遣わしおり、手習塾での教育を始めたと考えられる。享和2年(1802)頃の門人帳には、西袋村4名をはじめ、近隣5ヶ村より16名の門人が存在していたことがわかる。断片的な史料からではあるが、常時10~20名程度が学んでいたと考えられている。

当初は親類の要請によってその子弟を中心に教育を行っていたが、次第に西袋村民や周辺地域の子弟が入門するようになった。特に、周辺地域から入門する者は村役人子弟がほとんどであり、読み書き・そろばんなどの初歩的な教育とは別に、豊功が作成した編纂物を用いて村役人の実務能力の養成が行われていたのである。ここでは、村役人子弟に対する資質形成と豊功の編纂物との関係について見ることにする。

i 東方村名主役中村信義 まず、同じ八条領に位置する東方村(埼玉県越谷市)名主中村信義の幼少期における学習内容について見る。この中村信義とは、豊功の三男で八条領東方村(越谷市)名主中村家に養子入りした小澤千之助のことである。千之助は幼少期に豊功の尚古堂で学んでおり、千之助の学習から尚古堂の教育内容について知ることができる。次の史料は、信義により記された「信義所持之手本類控留」³⁷⁾という史料のうちの、「小澤豊功翁自筆之手本類」という項目である。

[史料5]

消息往来 教諭三章 今川帖 当用文章類(年始之賀状 同返事等二五通) 諸証文類(御鷹場御法度証文等一五か条) 比倫教 詩歌本 世話千字文 文章 み手本 本奉書五拾沢折本(詩歌文章類) 孝行教和讃 半紙八拾枚綴本(文章詩歌類) 端紙手本之類(婚礼祝之文等二一枚) 臨書本当用文章(二〇通) 諸証文類(御武家勤奉公人証文等九か条) いろは 都路 仮名状 名頭 江戸方角 国尽 商売往来

史料5を見ると、「いろは」をはじめとして「消息往来」や「当用文章類(年始之賀状 同返事等二五通)」など、手習塾において基礎的・初歩的な学習に使用される一般的な教材が確認できる。その中で、「教諭三章」や「諸証文類(御鷹場御法度証文等一五か条)」など実際に地域で作成・授受された文書類が、教材(太字のもの)として利用されていたことがわかる。これらの証文類は地域の特性を踏えたものである。この教材一覧は、青年期以前の手習本をまとめたもので、初歩段階では一般的な学習と併せて、地域で取りかわされる文書を利用し、地域で生きていくために必要な知識を身に付けさせていたことがわかる。

ii 西袋村小澤重教 小澤重教は、豊功の嫡孫である。表3にまとめた「御法令書雑事書類折手本日録書」³⁸⁾は、重教が14歳となった嘉永元年(1848)11月に作成された学習課程である。

この表の内容と先述した中村信義の学習内容とを比較すると、初歩的な手習本が含まれておらず、幕府発給の基本法令や西袋村で作成された証文類で構成されていることがわかる。これは、この手本日録が重教が14歳となった嘉永元年段階で作成されたものであり、この段階で重

37) 千之助のものは自身が安政三年に記した「信義所持之手本類控留」(小澤正弘①より引用)。

38) 嘉永元年11月「御法令書雑事書類折手本日録書」(西袋小澤平吉家文書・108)、『八潮市史』史料編近世Ⅱ所収。

表3 御法令書雜事書類折手本目録書

	表題	内容
1	正徳御高札	親子兄弟、毒薬、きりしたん、火を付けたるもの
2	享保御高札、明和御高札	たちん(駄賃)、草加よりのたちん(駄賃)、鉄砲、鷹番、ととう(徒党)
3	正徳御高札、寛文十三	湊高札/添高札/廻船掟書
4	寛文五、享保七	寺社掟書 三通/寺院掟書
5	五人組前書	郡代附五人組并延享元子柴村御役所改正文言
6	文政度御改革御教諭書 忖冊	
7	正徳三巳年諸御代官より被仰渡書	
8	正徳三巳年諸御料所諸百姓江被仰渡書	
9	正徳三巳年御代官より巨細被仰渡書	
10	御鷹場御証文類、餌差共同断	御法度証文/別紙証文 六通/請証文/餌鳥札之儀ニ付/雄子を取り申間敷/脇差指間敷
11	川船御役所江差上書類 拾弐ヶ条	新造船造立御訴/御極印証文/世所ニ改御極印願/土船ニいたし度御訴/土船ニいたし候ニ付御極印証文/古敷用新調ニ造立御極印証文/古敷用新調ニ造立御訴/壳船証文/買船証文/薄見御極印証文/船大小ニ随い御極印文字之事/上ヶ極印期日之事
12	道中筋御掟	正徳二辰年 掟 式通/正徳二辰年御達書/天明七末年宿助郷起請文 式通
13	質地之儀ニ付御触	寛永廿年未三月永代売田地御停止/名主百姓共持田地分限高より小分之もの分地御法度/名主百姓共持田地分限高より小分之もの分ヶ地之義ニ付御代官江御達し/名主百姓共持田地分限高より小分之もの分ヶ地之義ニ付村々江御触/貞享四卯年永代売頼納等弥不相成趣御触/正徳六申年永代売頼納等弥不相成趣御触/享保五子年借金手形不相成旨御達書御請書/享保六丑年質地流地之義ニ付/享保八卯年質地流地之義ニ付 式通/元文二巳年質地之義ニ付三ヶ条・式ヶ条御触/田畑永代売御停止巳前永代売証文 本紙写式通、添書忖冊
14	質地普通証文案類	質地証文案/小作証文案/質地定法品々心得之事/直小作証文振合/質地証文/小作地守証文/切畝歩証文/譲地証文/引当地借用証文/小作証文
15	西袋村質地証文振合 六ヶ条	
16	西袋村証文振合 拾ヶ条	借地証文/宗旨寺請証文/人別送り之事/人別送り請取之事/人別宗旨寺送り之事/奉公人請状之事/身代金添借証文之事/手過出火御代官へ御訴書之事/手過出火御鳥見方へ御訴書之事/晩朝夕晩夜の差別之事
17	普通雜事証文類 拾ヶ条	借用金証文/預り金証文/家賃証文/永代売証文/品もの売証文/養子証文/不通養子証文/讓状之事/養女証文/関所手形
18	奉公人証文類 九ヶ条	御武家方勤仕証文/並奉公人証文/乳母証文/年季奉公人証文/里子預り証文/食売女証文/遊女奉公人/店受状/引取証文
19	諸御触類 八ヶ条	寛文八年紺屋藍瓶役/寛文八年秤座御触 京江戸/安永五申年升座御触 京江戸/享保三年鍛冶頭/弘化四年虚無僧御触/安永三年虚無僧御触/御鷹餌鳥札餌差借り請之節差入候証文写/文政五午年罫屋御触
20	御触書類 八ヶ条	安永三年浪人旅僧修験女座頭御触/明和五子年浪人/天保十四卯年浪人御触/天保六年替女座頭御触/明和四亥年旅人煩候節取計ひ方御触/宝暦十二年百姓地を寺院江寄附停止御触/享和二戌年村入用之義ニ付御触/明和元申年家作之義ニ付御触
21	正徳二辰年評定所一座江被仰渡同所御腰掛御箱文言 式通	
22	慶安二年御触書御教諭書	
23		御成御触御請書/田方植付証文/用水不用証文/弘化三年餌差之儀ニ付御鳥見様より被仰渡書写/御尊判拝見書/宝暦十四年鳥乱ものの事御触/寛政三亥三月陰陽道士御門配下可請旨御触/御奉行所腰掛御振札/寛政二戌年江戸宿共江被仰渡書
24	慶長廿年卯七月禁中御法式	
25	公家衆法度	慶長十八年六月十八日/慶長十七年正月/慶長廿年卯七月/寛永六年巳九月
26	武家諸法度	慶長十八年六月十八日/慶長十七年正月/慶長廿年卯七月/寛永六年巳九月
27	武家諸法度	寛永十二年六月廿一日/寛文三年五月廿三日/寛文三年五月廿三日/天和三亥年七月廿五日/宝永七寅年四月十五日/
28	孝義録抜書	天和二年 駿河 孝行今泉□郎右衛門/天明二年 越後 奇特寄下鳥富次郎/寛政三年 紀伊 奇特寄名廻次郎右衛門/承応三年 備中 孝行者其助
29	文昭院様金銀之事ニ付被仰出書 式本	
30	文昭院様御遺訓のよし	

教は初歩的学習を終え、村役人の資質形成の段階へとステップ・アップしていたことによる。

この表からも、「評定所一座江被仰渡書」や「五人組前書」「文政度御改革御教諭書」、「御鷹場御証文類」、「川船御役所江差上書類」、「孝義録拔書」など、豊功の蔵書目録「名主役可心得居事共見聞ニ随ひ書写目録」（以下、「名主役目録」とする）に収録されている編纂物が教材として利用されていたことがわかる。豊功は、自ら作成した編纂物を秘匿するのではなく、限られた同一階層間ではあるが、積極的に活用したのであった。

また、この手本目録の目頭には、次のように記されている。

〔史料6〕

幼童へ御高札面、五人組前書、慶安度御改革教諭書、御拳場御法度書類、川船御役所差上書類、寺社御掟、湿地証文案詞向、御定法御触其外雑事御触書類、耕秤紺屋鍛冶研屋議定雑事諸証文案詞等為読習、成人之期御大法をも相弁、身分を慎、毎事堅可為相守度ハ勿論、持高丈ケ候事之取扱之節、分別之端しにもと希ふ心計りに、老の拙筆を不顧紙上を汚し候

史料6からは、幼年者に対して地域に関わる基本的な諸法令を学ばせることで、成人した時に「御大法をも相弁、身分を慎」、「持高丈ケ候事之取扱之節、分別」ある人間になってもらいたいという思いで豊功が教育にあたっていたことがわかる。実際には14歳の重教の教材であることから、基礎学習を修えた者で、家督相続していない青年者を指していると考えられる。さらに、この手本目録が豊功の嫡孫に対して書かれたこと、これらの諸法令・証文が第一義的に村役人に関係することから、村役人子弟に対する資質形成のためのものとして豊功がまとめたということがいえる。

また、小澤豊功の尚古堂では、貸本屋で借りた書物や村方文書などの書写を通じて、村役人の資質形成が図られていた。「名主役目録」に収録されている編纂物や写本を、尚古堂門人が作成していることが確認できる。次の編纂物や写本は、豊功の指示で書写しているものである³⁹⁾（編纂物名の後の丸カッコは、「名主役目録」での分類番号）。

『御用向願訴振合目録』（公10カ） 柳宮村大熊安五郎（文化9年4月・16歳）

『評定所法式』（公1） 西袋村秀厳（文政2年4月）

『万治ヨリ文禄（元禄・筆者註）迄御出座公事御裁許書』（公6）

西袋村小早川大助（文政7年）

『勤農固本録』（地3） 中馬場村石井宗七（文政7年・14歳）

『律令要略』（公14） 西袋村小澤庫太郎（文政10年・14歳）

『御改革御教諭書写』（改） 中馬場村石井宗七（文政11年11月）

このように、編纂物や写本の作成に携わったのは、14歳以上の青年の門人であった。つまり、尚古堂では、初歩的教育を学ぶ幼年層とは別に、村役人としての資質を学ぶ青年層が存在していたことがわかる。

39) 小澤正弘「寺子屋尚古堂について」（前掲註37参照）。

編纂物のほとんどは豊功によって編纂されたものであるが、膨大な編纂物は複数の人々の手を借りて蓄積されたものでもあった。そして、自らの地域運営マニュアルとして秘匿するのではなく、尚古堂での教育を通じて積極的に公開・活用することで、八条領における村役人層の資質の養成を担っていたのである。

(2) 資質養成機関としての郷学設置

ここでは、武蔵国比企郡川島領の前橋藩領川島組村々(埼玉県川島町)で、明治3年(1870)に設立された郷学・河島書堂について紹介しておく⁴⁰⁾。

河島書堂は、前橋藩領川島組(川越周辺の飛地領支配のための組合村の一つ)の取締役や頭取名主ら惣代層を中心に計画され、前橋藩の追認を経て設立が進められた。入学対象者は13～14歳以上の村役人及びその子弟と、村役人・地域指導者層の予備軍である有力農民の子弟とされ、実際の入学者も村役人とその子弟がほとんどであった。

開校に際しては、地域の手習塾で基礎的な漢学等を学んでいた青年層が河島書堂へ移籍しており、地域に存在する手習塾や私塾と併存しつつ、その上位に位置づけられていた。

学習内容は、当初は漢学・国学・洋学を計画していたが、実際には漢学のみが教授された。学規には「郷童読書順」として、「始三字経、千字文、大統歌、孝経、大学、論語、中庸、孟子、小学、易春秋、詩経、書経、礼記、春秋、左氏伝、国語、文章規範、八大家文集、其余ハ望ニ可任事」とある。また、明治5年4月に入間県に提出された「郷学校取建之旨趣」には、これらの書物について「経書句読佐藤氏(筆者註一佐藤一斎)ノ定本ヲ用フ」とある。また、「詩文章好ム者ハ作ヘシ、好マサル者及ヒ能ハサル者ハ意ヲ絶テ作サルモ亦可也」と、個人の任意ではあるが、地域指導者層を主体とした地域文化の一つである漢詩文などの作成についても触れている。

教授を担当したのは川島組の惣代層であり、彼らは江戸遊学を経験したり、遊歴の学者に師事するなど、高い教養を身に付けていた。

特徴的なことは、会所と合併され、施薬院の併設も検討されていたことである。地域運営(会所)・学問修練(河島書堂)・窮民救恤(施薬院)の三機能の一体化が図られ、その一体化によって地域指導者層としての心構えから漢学素養・実務能力、地域課題解決を担う全般的機能まで、広い意味での資質を養成することが可能となり、地域秩序の安定化の基盤となる地域指導者層の再生産の場と考えられていたのである。特に慶応2年の武州一揆において、打ちこわす側、打ちこわされる側、防衛する側に分かれて混乱した経験を有するこの地域では、地域の安定化が重要課題であった。

河島書堂は明治政府のもとで近代小学校へと変わり、旧支配領域の消滅と小区制の導入のなかで、本来の目的を継続することができずに解体された。しかし、そこで学んだ村役人及びその子弟は、近代の地域行政において主導的立場を担っていったのである。

40) 拙稿⑤「近代小学校の成立過程と地域社会—地域指導者層による郷学所体制維持運動とその終焉—」(埼玉県立文書館『文書館紀要』第20号、2007年3月)、同⑥「近代小学校の成立過程と地域社会—地域指導者層による郷学所体制維持運動とその終焉—」(埼玉県立文書館『文書館紀要』第20号、2007年3月)。

村役人の資質形成は、徳川政権のもとで村請制が採用されて以降、基本的には家庭内で【私的・個別的】に行われていた。これが18世紀末から19世紀になると、地域教育の隆盛のもとで、地域住民の多様な要求に応える様々な手習塾が設立され、村役人子弟を対象とした資質養成も【私的・集团的】に図られるようになった。そして、19世紀中期、幕末維新期ごろには、地域社会が抱える諸問題を解決できる有能な地域指導者の再生産が強く意識され、一定の基礎教育を受けた村役人子弟や同階層のいわば村役人予備軍を対象に郷学を設置して【公的・組織的】に資質養成が行われるようになったのである。

このような再生産システムの目的は、地域住民の権益確保や地域の安定化と、村役人らの家格保持や「家」の永続という二面性を持つものであった。地域の安定化を第一として支配から一定の距離を置いてはいるが、反面で既存の支配体制を前提とし、その中での家格や立場の保持が図られたことにも繋がったことに注意する必要がある。

おわりに

本稿では、村役人に求められる資質の変容と、広く共通認識として形成された資質の内容、そして期待された資質の再生産について、武蔵国郡村部と江戸市中を中心に検討を行った。特に、これまで注目されてこなかった村役人の跡役願書の算筆文言を分析の素材として、平時にどこにでも確認できる村においてどのように認識され、合意形成が図られていたのかを明らかにした。本稿で検討したことについて、補足を加えてまとめておく。

①跡役願書と算筆文言

村役人の跡役願書は、村請制が採用されて以降、明治5年に村役人制度が廃止されるまで全国各地で通時的に作成されてきたものである。定期的に作成されるため、書式が統一化し、領主の違いを超えてほぼ同じ形式・内容となっていく。

そのように定型化した跡役願書において、19世紀に新たに算筆文言が書き加えられることとなったことは、大きな画期と評価できる。新たに加えられただけでなく、「ケ成出来」「相応ニ出来」る算筆能力が求められたのである。また、特定の村だけでなく、ほぼ同時期に郡村部や都市で広域的に見られることから、近世社会の動向と連動したものと理解できる。

19世紀以前より村役人の資質は蓄積され、レベルアップが図られていた。しかし、本稿ではそれを前提としつつ、算筆文言として実際に文面に現れたことの意義を重視した。レトリックの問題ともいえるが、各地で同じような文言が書かれるようになり、実態を伴いながら定式化したことの意義は近世社会を考える要素となり得るであろう。

筆者はこの社会的動向を、久留島浩の指摘する年貢「村請」から御用「村請」への変質と密接に関係していると考え。また、この背景には、地域を取り巻く状況の変化とともに、民衆の知的力量の上昇と、村民の要求に応えられる力量が村役人側に蓄積されていたことが挙げられる。

この跡役願書は、入札や村方騒動を通じて示されるものとは違う、民衆の意志や地域社会を成り立たせている思想的基盤を探る新たな研究素材と評価できると考える。

本稿で示した事例は、地域的・数量的にも十分なものとは言えないが、一定の傾向と意義を見出すことができた。今後、調査範囲を広げていくことで支配や地域との関係、筆算文言が共

有化されていく要因などについて明らかにしていきたい。

②新たに期待される村役人の資質

19世紀以降、村役人には文字文化を背景とした高い資質・教養が求められた。地域内では、広域化・複雑化・多様化する地域社会の課題に対して、先例・証拠となる膨大な史料群を駆使し、また日常の地域運営のほか、訴訟や政策転換などにおいて臨機応変に対応できる総合的な能力が必要とされたであろう。また、地域教育が普及することで、村民の知的力量も総体的に向上したため、村役人に求めるレベルも比例して高まったと考えられる。村役人側も村民との一定の階層差を保持するため、蔵書形成、遊学、文化交流などを通じて高い教養の獲得を目指した。

19世紀以前の史料には「筆算」とだけ記されていたが、19世紀になると「ケ成出来」「相応ニ出来」という修飾語とともに記されるようになった。これは、19世紀以前には年貢や村入用の勘定を正確に行うこと、きちんと年貢や諸役の納入を行うこと、つまり年貢「村請」を実現することが期待されていた。そのため、村役人にまず求められた資質は、基礎的な地域行政を滞りなく遂行すること、勘定を問題なくできるというレベルでの算筆能力であった。19世紀になると次第に、支配行政を安定的に取りしきるとともに、地域の論理に基づいた地域の安定化、地域住民の権益確保という総合的能力が求められた。それが「ケ成」「相応」という文言に込められたと考える。

これらのことは、地方支配機構総体と併せて評価する必要がある。領主や町村政組織、様々な職能集団など、地域特有のあり方が存在しており、それによって求められる資質・能力や、期待される階層も異なると推察される。様々な場で顕れる算筆文言、問われる算筆能力は、近世を通じての村役人の性格を如実に反映しているのである。

19世紀以降に求められた村役人の資質を体現するものとして、筆者は「村の編纂物」を考えている。これについては既に論稿としてまとめているので、そちらを参照していただきたい。

③合意事項としての算筆能力

19世紀の地域社会を考える際の一つの課題は、階層分解や社会不安など諸矛盾が増大するなかで、地域の破綻を回避しえた要因とは何であったのかということである。地域社会では、村方騒動や訴願、時には百姓一揆によって要求実現と地域運営の修正を繰り返しながら保持しえた。一方で、大きな騒動も発生せずに明治を迎えた地域も多い。表面的なものとはいえ、一定の安定的な地域運営を可能とした要因について考える必要がある。

村役人や惣代などの地域指導者層は、地域に居住してその役職を担当し、そのなかで家格保持と「家」の永続を実現するためには、少なからず地域住民からの信任・信頼を得なければならない。村民の意志が反映される入札が行なわれたのは限られた村であったと言ってもよく、大半は世襲や一部の有力村民による見立てであった。

筆者は村民と村役人との間に信頼関係が形成されていたことが、地域の安定的な継続性を担保したと考える。その信頼関係とは、安定的な地域運営と村民の権益確保を実現することのできる村役人の資質であり、それが跡役願書の算筆文言といえる。高いレベルの資質の必要性を村役人や支配権力も強く意識し、幕府・領主、村役人、村民の共通認識となっていたと考えられる。19世紀以降、広域化・複雑化・多様化する地域社会のなかで、村役人の資質が強く問われるようになった段階で、跡役願書に新たに「筆算等ケ成出来」などの算筆文言が記され、願

書が領主へ提出・受理された段階で三者の合意が取り結ばれたこととなったといえよう。

村社会の変化を背景に、直接的に村民の意志が反映されない場合でも、村役人就任においては跡役願書という形で、村民側の要求を反映させた合意形成が図られるようになっていたと評価できる。

入札や村方騒動などでは、算筆能力の有無が任罷免で優先されており、三者の合意事項として成立していたことを裏付けている。

④村役人の資質の再生産

19世紀以降に「筆算等ケ成出来」る能力が期待された村役人らは、家格保持や「家」の永続を安定的に実現するため、その期待に応えなければならなかった。このことは、知識人・篤農家の著述だけでなく、子孫への家訓のなかでも強く意識されていた。

村役人を担う「家」では、19世紀以前より見習いなど実務経験を中心に継承されてきた。しかし、広域化・複雑化・多様化する地域社会を担うだけの資質、算筆能力を身に付けるには、実務経験や家庭内での個別的対応では難しくなったと考えられる。その中で、村役人子弟を対象とした手習塾が開設され、時には地域が協力して郷学を設立するところもあった。

近世を通じた村役人の資質形成の再生産のあり方をまとめると、家庭内での〔私的・個別的〕→手習塾での〔私的・集团的〕→郷学など〔公的・組織的〕という流れになる。多くの村では家庭内もしくは手習塾での養成となるが、本稿で明らかにしたように、村役人の資質養成が教育の場を利用して再生産されたことは大きな画期といえる。

一方で、村役人層において地域運営の知識や技術が高められ、学習の場などを通じて再生産されることで、文字文化を背景にした地域＜知＞が一部の「家」・階層に集中することにも繋がった。村役人層間に限定されることから、特定の階層での「文化資本」となったのである。地域の知的力量の飛躍的な向上をもたらし、このような地域運営システムを構築したことを近世地域社会の到達点と評価できる。その結果、明治以降の地域社会においても、基本的に近世期の村役人層が引き続いて地域行政を主導することとなった。近代の地域社会の課題は、民衆側がそれを相対化・克服し、新たな地域社会のあり方を創り上げていくことにあったといえる。